慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	南インドにおける儀礼と社会の変化 : ケーララ州テイヤムを事例として
Sub Title	
Author	古賀, 万由里(Koga, Mayuri)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.169- 178
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

博　士（平成 16 年度）
博　士（社会学）［平成 16 年 7 月 14 日］
甲　第 2291 号　古賀万由里

南インドにおける儀礼と社会の変化—ケーララ州テイヤムを事例として—

〔論文審査担当者〕

主　査	慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員 文学博士	鈴木　正崇
副　査	慶應義塾大学名誉教授 文学博士	宮家　　準
副　査	慶應義塾大学文学部教授 文学博士	野村　伸一
副　査	立教大学名誉教授 Master of Arts (University of Calcutta)	小西　正捷

内容の要旨

本稿では，南インド・ケーララ州北部村落で実践されている憑依儀礼（テイヤム儀礼）を事例とし，儀礼が，従来のように大伝統と小伝統といった二元論的解釈による固定的な文化モデルで解釈されうるものではなく，地域社会の内外のポリティックスにより，生成されるパフォーマンスであることを明らかにした。

従来の研究では，インド社会の宗教は，シュリニバスやマリオットのように，サンスクリット文化と民俗文化という二極文化の間で融合するといった，構造主義的二元論か，もしくはデュモンのように，ブラーマンのもつ浄性が全てを包括するといった，全体論で分析されてきた。しかし，前者の場合，二文化間の連動の原因や過程については具体的に明らかにされておらず，後者の場合は，ブラーマンのイデオロギーを重視しすぎており，他の王権や支配者といった価値観がくみとられておらず，大衆ヒンドゥーイズムをとらえる適切なモデルとは言い難い。

儀礼文化は，歴史的に，権力者と民衆との争い，また経済的優位者と劣位者の地位の逆転などにより，その組織形態，象徴意味を変化させてきた。現代においては，商業化，観光化，政治的プロパガンダに巻き込まれ，儀礼はその様相を大きく変えつつある。こうした状況が，ケーララ州のテイヤム儀礼において生じていることを明らかにした。

以下，章ごとの内容をまとめる。第 1 章では，まず目的を述べ，ヒンドゥー文化，ケーララ，テイヤム儀礼に関する先行研究を概観し，調査地であるケーララ州のカリヴェルール村の概要について記述した。

第 2 章では，テイヤムの伝承，儀礼の過程，担い手や神概念に関して考察した。伝承からは，テイヤム儀礼が王権と深いかかわりがあったことが分かる。16, 7 世紀にケーララ北部を治めていたコーラッティリ王の守護神である女神は，地域で支配カースト（ナーヤル）により，別名で祀られており，王権の支配領域が同一神によって守られていることを示している。寺院の最高権威者は王を意味するコーイマと呼ばれ，ナーヤルなどの土地所有者が担っており，主権と祭祀権の一致がみられる。王権や寺院，

祭主，パフォーマーの間で，パフォーマンスの義務・権利が領域によって定められており，相互の力関係を示しているといえる。儀礼には全てのカーストが役割を担っており，ホカートが論じたような，王を中心とした供犠組織の形態をみせている。ただし，歴史的にみると，王国の中において王の位置は必ずしも頂点ではなく，有力な隣国の領主がブラーマン寺院に権威をもち，そのブラーマン寺院の司祭がテイヤム儀礼において最高権威をもつようになった。王とブラーマンはどちらが絶対的に優位にあるというものではなく，両者の関係は絶えず対立・緊張関係にあることが明らかにされた。

英国支配後は英国政府の統治の下，王の政治力は弱まり，独立後は州政府が政権をつかさどり，王は政治力を失った。土地改革後，王家は広大な土地も失い，自らの寺院でテイヤム祭祀を行う余力もなくなった。王と同様，地域の大土地所有者らも土地を失い，祭祀執行能力を失い，祭祀権を地域の多カーストから構成される委員に譲りわたしたりしている。テイヤム祭祀の場におけるコーイマの席にも，高位カーストの元大土地所有者が不在で，祭礼委員長の方が実質上の権威者となりつつあるといったように，政治権力は王から民衆へ，高位カーストから低位カーストへと移行している。

次に，儀礼の過程であるが，テイヤムとなる霊媒（テイヤッカーラン）である指定カーストは世襲であり，化粧，衣装，踊りといった定まった行為を行うことにより，身体と精神を変容させ，徐々に神，テイヤムの境地へと近づいていく。それに対し，もう一人の霊媒であるコーマランには，神の啓示といった形で憑依が起こると考えられる。テイヤム儀礼をブラーマン寺院での儀礼と比較した場合，ブラーマン寺院においては神の力（シャクティ）の存在が普遍的であるのに対し，テイヤム寺院ではシャクティの存在は祭礼の際においてのみ確認され，その存在もパフォーマーの技量によって信憑性が左右される。これがテイヤムに対して宗教儀礼やアートといった多様な解釈を生み出す要因の一つといえる。

最後に，テイヤム儀礼で主な担い手となるワンナーン，マラヤン・カーストの祭祀権と称号，継承者の親族関係について，およびその他の儀礼的役割を担うもの（コーマラン，アンディティリヤンなど）について述べた。そして，①司祭，②霊媒（コーマラン，ヴェリッチャパードゥ），③霊媒（テイヤッカーラン），④地域の権利者（コーマラン），⑤家の年長者（アッチャン）とヒエラルキーの関係を検討した。神の力，シャクティは司祭から霊媒の手を通して，祝福として世俗的権利者に分配される。司祭と霊媒のヒエラルキーに関しては，形式度が弱くて自由に操作できる司祭の方が上であるとする見方があるが（田中，1990），ヒエラルキーは形式性や自由度よりも，神との接触期間の長さによるものであり，それは日常と非日常といった場によっても異なるといえる。また，デュモンは，司祭がもつ宗教的権威が王のもつ世俗的権力を包摂するというが（Dumont, 1970），どちらが常に優位であるわけでなく，儀礼の場においては宗教的権威が，日常の場においては世俗的権力が優勢であることが分かった。

最後に，テイヤムのストーリーの類型と，神々のパンテオンを検討する。ストーリーは，ヒンドゥー神話に基づく話（プラーナ型）と，地域で語られる話（ローカルストーリー型）に大別される。また，神格には，女神，祖霊神，英雄神，動物神，妖術神などが存在する。インド村落で祀られている神々には，菜食の供物の受け取るプラーナ系の神と，肉食の供物を受け取る地域の神があり，浄性の高いプラーナ系の神が地域の神よりも優位に立つといったパンテオンが存在すると，バッブによって論じられた。しかし，テイヤムの場合は，このようなパンテオンの存在は明確でない。プラーナ系の神であっても血の供犠を必要とし，菜食・肉食の区分もヒエラルキーにはつながらない。つまり，テイヤム神の間では浄・不浄や菜食・肉食によるヒエラルキーはなく，祀られる寺院によって，主神と副神が異なり，

それによって優劣が生じることが明らかになった。

第3章では，カンヌール県カリヴェルール村でのテイヤム儀礼の事例をとりあげ，組織，過程，儀礼空間を検証した。事例としては，①個人の祈願によるもの，②ブラーマンの家，③ナーヤルのタラワード（家），④カースト寺院，⑤パブリック寺院，⑥カースト大寺院で行われるものをとりあげた。ブラーマンの家で行われるテイヤム儀礼は，他のカーストによって行われるものと異なり，ブラーマン司祭による寺院内でのサンスクリット儀礼が，テイヤム儀礼と同時並行して行われる。寺院内での礼拝儀礼は，テイヤムと同じ神格の像に対して行われるものであり，テイヤムとしての姿で人々の前に顕現しない。また，テイヤッカーランが寺院内に立ち入ることはなく，テイヤッカーランとブラーマンの直接の接触は避けられており，ブラーマンの浄性は保たれる。ナーヤルの寺院においても，司祭はブラーマンであり，低位カーストの寺院においては，司祭は同一カーストのものが担う。このように，祀る神は同一でも，司祭のカーストには差異がみられる。また，寺院のつくりも，高位カーストの場合は祠の周りに壁を設け，中には低位カーストが入れないなど，カーストによる空間区分が設けられる。神々のヒエラルキーはなくとも，祀る側にはカースト・ステイタスを誇示する場が設けられており，カースト間の差異を際立たせている。

小規模な祭礼は，単一カーストにより組織され，同カースト間の水平的統合と，儀礼で役割を担う他のカーストとの垂直的統合がみられるが，中・大規模な祭礼では，多カーストや多宗派のものが参加するようになり，カースト，宗派を越えた統合がみられることが明らかになった。

第4章では，テイヤム神話の分析を試みた。テイヤム神話はトーッタム（祭文）の中で語られるか，または口頭によりローカルストーリーが伝承されてきた。トーッタムが公に記録されることはなかったのだが，1960年代以降，民俗学者によるトーッタムの収集と出版がなされ，トーッタムがテイヤッカーラン以外の人々の目にふれるようになった。また，口頭伝承によるローカルストーリーも，寺院や祭礼委員により出版されるようになる。さらに1990年代になると，祭礼のビデオやVCDに記録され販売されるようになり，テイヤムはトーッタム，パフォーマンスとも，ビジュアルとして保存されるようになる。このような，口承から書承，そして画承といった動きは，テイヤム神話の生成に大きく影響を及ぼした。

神話の生成の実例として，ムッタッパン神とポッタン神をとりあげた。ムッタパン信仰は4段階に従って発展した。第一は，山岳部のトライブの英雄神または祖先神として祀られていた。第二は，高位カーストの侵入により，祭祀権が奪われ，また神話や儀式がヒンドゥー化する。第三には，平地部へ伝播し，政治・経済的に台頭してきた低位カーストによって祀られ，巡礼寺院となる。ここでは，高位カーストと低位カーストとの間に土地をめぐるコンフリクトが生じる。第四には，ケーララ北部の地域社会を超え，ボンベイなどの都市部，または海外で祀られるようになる。このように，ムッタッパンはローカルな場からリージョナル，そしてナショナルへと拡大していった。

ポッタン神話では，ある地域ではアンタッチャブルがブラーマンに殺されて神格化したという話が語られているが，一般に普及しているのは，祭文に書かれた僧侶シャンカラーチャーリヤがアンタッチャブルに出会って改心するという，サンスクリット哲学的ストーリーである。哲学的ストーリーは，民俗学者によって出版され，カーストの平等を示すものとして，共産党支持者らに好んで引用されなど，政治的利用も行われている。神話には，文字化して記録されるものと，記録されずに記憶されるものがあり，神話の見解はコミュニティによって異なり，サンスクリット的ストーリーと民俗的ストーリーには，

相互の分節，接合がみられる。よって神話は多元的であり，権力対立の中で選ばれ，記録または記憶されることにより熟成されていくものであるといえる。

第5章では，社会の中でテイヤム儀礼がいかに変化していっているのかを検討した。近年の傾向の一つは，儀礼としての再生であり，もう一方は，舞台化としてのパフォーマンス化である。テイヤッカーランの地位の変化や儀礼の再生現象，政治や観光化の影響を受けて，パフォーマンスや意味づけに変化がみられることがわかった。独立運動期から1960年代の間には，政治的不安や飢饉，土地改革の影響で儀礼が一部で中断される。それが，1990年代になって再開されるようになった背景には，1) 母系制崩壊後に，母系以外のものの手に土地が渡ったことに対する，母系親族の不満，2) 1940年以降に南部から土地を求めて北上したキリスト教徒の，土地所有に対する反感，3) 1980年代から急増した，湾岸諸国への出稼ぎ労働者が，自らの所属するカースト寺院やタラワードのテイヤム儀礼に，文化的ルーツを求めるといった要因がみられた。

一方で，1960年代からテイヤムが舞台芸能として評価されるようになる。テイヤッカーランのライフヒストリーの分析によって，彼が貧しいテイヤッカーランから，美しいアーティストへと社会的地位を上昇させていったことが分かった。そこには，アンタッチャブルの地位上昇志向という強い意識が働いたというよりも，中央政府の国民国家統合，ケーララ政府の地域文化奨励，地域の文化団体の名声といった，外部の思惑により舞台化が進められていったことが明らかになった。

1990年代後半になり，テイヤムの舞台化に反対する運動が生じ，またそれに反対する勢力と論争になる。州政府および左派団体は，アートとしての価値を重視し，伝統保存のための舞台公演を支持した。一方，右派団体は，信仰と慣習を重視し，舞台公演に反対する。そこには，原理主義，資本主義に反対し，世俗主義，社会主義を主張するコミュニストと，それに対抗するヒンドゥー至上主義 (B. J. P.) といった政治上のイデオロギー対立がみられた。それだけでなく，コミュニズム対ファンダメンタリズム，コミュニズム対資本主義，グローバリズム対ローカル・アイデンティティといった複数の対立が錯綜している。テイヤムはポリティックスと文化が絡み合い議論がなされる「アリーナ」であり，そこではテイヤムの伝統を保存させようとする動きが，逆に「新たなテイヤム」を創出していることを明示した。

終章では，「テイヤム」と呼ばれるものが，常に儀礼と認識されていたのではなく，時代によって評価が異なり，儀礼からパフォーミング・アートへと変容していることを示した。19世紀にケーララを訪れた宣教師や民族誌家にとって，テイヤムは神ではなく，悪魔であった。ケーララの人によってテイヤムが表象されるようになったのは，1930年代になってからであり，高校教師や郷土史家らによって，儀礼や神話の意味づけがなされ，テイヤムの起源やカーストとの関係が研究されるようになり，それが一般の人々の共通認識となった。最近では，テイヤムの衣装や踊りの芸術性が評価されるようになり，テイヤムはアートもしくはパフォーマンスととらえられる傾向がある。

また，祭礼では演出家とパフォーマー，観衆の三者間の相互作用を通して，テイヤムというパフォーマンスの意味とイメージが形成されるため，同時に多元的なイメージが存在することを指摘した。

さらに，テイヤムのあり方が儀礼からパフォーマンスへと移るにつれ，性質や形式，参加者や統合の仕方に違いが見られること指摘した。タラワードやカースト寺院で行われる儀礼では宗教性が濃く，形式が定められており，参加者は単一カーストであり，また地域の垂直的統合がみられる。それに対して，大祭や舞台公演といったパフォーマンスでは，娯楽や観光化，商品化の要素が強くなり，形式は自由度を増し，参加者はマルチカーストおよび宗派となり，地域の水平的統合または地域社会を超えた方向へ

と変わっていくことを提示した。

最後に，ヒンドゥー文化二元論を再考し，サンスクリット文化と民俗文化は，カーストの向上思考によって揺れ動くだけでなく，商業主義や観光化，伝統性や権力誇示といった戦略の中で，意図的に選び取られていることを指摘した。第４章でとりあげたムッタッパン神話の生成過程をみると，祭祀権を握ったカーストによって神話が読みかえられていき，サンスクリット的神話と民俗的神話がときに節合され，ときにその枠組みを超えて受容されている。また祭礼の場では，サンスクリット神話と結びつけて寺院の歴史や権威を強調する一方で，ケーララ北部でしか存在しない民俗文化としての要素を，観光客に訴える。このようにサンスクリット文化と民俗文化の取り込みは，儀礼権威者の意図によって操作されているといえる。

本稿では，儀礼が，宗教儀礼としての固定的な要素をもつばかりでなく，社会の中で，権力関係に左右されながらその形態を変え，意味づけが生成されていることを，テイヤム儀礼の実践と神話の解釈を通して明らかにした。構造主義的，また象徴主義的アプローチではとらえなれない動態的な側面を分析している，人類学的儀礼研究であるといえる。また，南アジア研究の分野においては，二元論的文化論，そして全体論といったモデルにおさまらない，近代化とグローバル化を考慮した，新たな分析視点を提示したといえる。

論文審査の要旨

本論文は，南インドのケーララ州北部で行われる「テイヤム」と呼ばれる祭祀の全容を明らかにして，社会との相互作用を通して変貌していく過程を分析し，近代の制度や思考が民俗社会に入り込むことで儀礼が新たな次元に再創造されていく状況を考察した。南アジアの地域研究への寄与にとどまらず，儀礼を現代社会の大きな変動の中に位置づけた研究として高く評価できる。目次の内容は以下のとおりである。

第１章　研究の対象と目的
　第１節　目的
　第２節　先行研究
　第３節　調査地の概要
第２章　テイヤムの概観
　第１節　伝承と歴史
　第２節　儀礼のシークエンス
　第３節　担い手
　第４節　神概念
第３章　事例研究
　第１節　個人の祈願
　第２節　ブラーマンのイッラム
　第３節　ナーヤルのタラワード
　第４節　カースト寺院
　第５節　パブリック寺院

第6節　大カースト寺院
第7節　タイプ別比較
第4章　生成される神話
第1節　テキスト化の問題　―口承から書承，そして画承へ
第2節　テイヤム神話の主題に関する議論
第3節　ムッタッパン信仰の発展
第4節　社会批判の神，ポッタン・テイヤム
第5節　サンスクリット文化と民俗文化の節合
第5章　変化するテイヤム儀礼
第1節　儀礼の再生
第2節　テイヤッカーランの社会的地位の変化
第3節　舞台化論争に見られる儀礼の政治性
終章
第1節　儀礼から生成的パフォーマンスへ
第2節　ヒンドゥー文化二元論再考
第3節　結論

第1章では，本研究の目的を述べる。従来のインド社会の人類学的研究では，レッドフィールドの大伝統と小伝統の理論に基づいて，サンスクリット文化と民俗文化の二極を設定して相互作用を説く二元論（シュリニバスやマリオット）と，祭祀を司るブラーマンのもつ卓越した浄性のイデオロギーが社会を貫徹し，浄と不浄の価値観が階層化の秩序を構成して全てを包括するという全体論（デュモン）が主流であった。しかし，前者は二文化間の連動と融合に関しての具体的な考察に欠け，後者はブラーマンのイデオロギーを偏重し，王権や支配カーストの価値観や，底辺からの視点が組み込まれない一元論になる。従って，両者とも大衆ヒンドゥーイズムの把握には不十分と考えて，変化を重視した多次元的モデルの構築を提唱する。本論に先立ち，インドの人類学の動向やテイヤムの先行研究を概観し，調査地の政治史，カースト，親族関係，年中行事，寺院の実態を記述している。

第2章では，テイヤムの伝承，儀礼の過程，担い手や神概念を考察し，テイヤムと王権との深い関わりを解明した。16～17世紀にケーララ北部を統治したコーラッティリ王の守護神は女神であり，地域の支配カーストのナーヤルも女神を祀り，王権の支配領域が同系統の神の守護の下にあった。寺院の最高権威者は王を意味するコーイマと呼ばれ，ナーヤルなどの大土地所有者が寺院の保護者であるというように，王権と祭祀権の一致が見られた。王権と寺院，祭主，担い手の間で，テイヤムに関する義務・権利が領域ごとに定められ，儀礼では全てのカーストが関与するなど，ホカートが論じたような，王に奉仕する供犠組織の形態の様相があった。但し，コーラッティリ王は王国の頂点に位置せず，隣国のカリカットの領主がこの地域のブラーマン寺院を差配し，その司祭がテイヤム儀礼では最高権威を保持するなど，王とブラーマンは対立・緊張関係にあった。

英国の植民地統治下で，王の政治力は弱まる。独立後は州政府が政権を司り，土地改革後は，王家は広大な土地を失い，自らの寺院でテイヤム祭祀を行う余力もなくなった。大土地所有者も土地と祭祀執行能力を喪失し，祭祀権を多カーストから構成される委員会に譲り渡し，最高権威者のコーイマの位置

は祭礼委員長が取って代わって実質上の権威者となった。政治権力は王から民衆へ移行して，低位カーストが力を持つようになっている。

次にテイヤムの儀礼の過程を検討する。儀礼を担う人々を，①司祭（アンディティリヤン），②霊媒（降神型。コーマラン，ヴェリッチャパードゥ），③霊媒（世襲型。テイヤッカーラン），④地域の権利者（コーイマ），⑤家の年長者（アッチャン）などに分けて，個別の役割と相互関係を考察した。コーマランは降神型の霊媒で，神の啓示で憑依すると信じられているのに対して，テイヤッカーランは世襲型の霊媒で，指定カーストのワンナーンやマラヤンが担い，化粧，衣装，踊りを通じて，身体と精神を変容させ，徐々に神霊へと近づいていく。両者は組をなして儀礼を執行するが，後者が中心的な担い手である。神の力のシャクティは儀礼のみで確認され，霊媒の技量で信憑性が左右される。これがテイヤムに対して多様な解釈を生み出す要因の一つで，シャクティが恒常的にあるとされるブラーマン寺院の神との違いであるという。シャクティは司祭から2種の霊媒の手を通して，世俗の人々に祝福として分与される。霊媒と司祭の位置付けに関して田中雅一は，形式性や自由度に基づいて司祭を上位とするが，テイヤムでは神霊との交流が日常的か非日常的か，長期か短期かを考慮すべきで，相互の優劣は規定できないという。また，司祭の宗教的権威が王の世俗的権力を包摂するというデュモンの主張に関しては，テイヤムでは儀礼の場では司祭，日常生活では王というように，それぞれの強調点を違えるだけだと考える。最後に，テイヤムの起源神話の類型と，神霊のパンテオンを検討する。起源神話は，ヒンドゥー神話に基づく話（プラーナ型）と，地域で語られる話（ローカルストーリー型）に大別される。また，神格には，女神，祖霊神，英雄神，動物神，妖術神などがある。バッブは北インドの村落の神々には，菜食の供物を受け取るプラーナ系の神と，肉食の供物を受け取る地域の神があり，浄性の高いプラーナ系の神が地域の神よりも優位に立つとしてパンテオンの存在を明示したが，テイヤムの場合は，パンテオンは明確でない。プラーナ系の神でも血の供犠を必要とし，菜食・肉食の区分も厳格ではない。テイヤムの神霊のパンテオンでは浄・不浄や菜食・肉食によるヒエラルキーはなく，祀られる寺院によって，主神と副神が異なり，土地に応じて優劣が変化することを明らかにした。

第3章では，カリヴェルール村の事例をとりあげ，祭祀組織・儀礼の過程・儀礼空間を，①個人の祈願，②ブラーマンの家（イッラム），③ナーヤルの家（タラワード），④カースト寺院，⑤パブリック寺院，⑥カースト大寺院，に分けて考察した。ブラーマンの家では，寺院内でサンスクリットの祭式が，テイヤムと同時並行で行われ，主神はテイヤムと同じだが，人々の前には具象的には顕現しない。テイヤッカーランは寺院内に立ち入らず，ブラーマンとの直接接触は避けられて浄性が保たれる。ナーヤルの家の司祭はブラーマンだが，低位カーストの寺院では同一カーストの者が司祭となる。祀る神は同一でも，司祭のカーストには差異がある。また，寺院の構成も，高位カーストは祠の周囲に壁を設けて，低位カーストを入れないなど空間区分が設けられる。神々のヒエラルキーはなくても，祀る側にはカーストの地位を誇示する場が設けられて，カースト間の差異を際立たせる。小規模な儀礼は，単一カーストで組織されて相互の水平的統合があり，役割分担を通じて他のカーストとは垂直的統合が見られる。中規模・大規模な儀礼では，他カーストや他宗派の者が参加して開かれた統合が見られるようになってきたという。

第4章では，テイヤムの起源神話の分析が試みられている。神話は儀礼で唱えるトーッタム（祭文）で語られて伝えられていたが，1960年代以降，民俗学者が収集と出版を行い，記録化されて多くの人々の目にふれるようになった。テイヤムにまつわる地域伝承も，寺院や祭礼委員会が記録化して出版する

ようになる。1990年代には，儀礼がビデオやVCDに記録され販売されて保存・複製が進む。口承と書承と画承の間を揺れ動く中で，神話が変形されたり新たに生成されるようになった。神話の生成の実例として，ムッタッパン神話を考察し，四段階の変化を推定した。第一は山岳部の部族の英雄神や祖先神の段階である。第二は高位カーストのナーヤナールの侵入で祭祀権が奪われ，神話や儀式がヒンドゥー神化する。第三は平地部へ伝播して政治・経済上で台頭が著しい低位カーストのティーヤ（椰子酒作りカースト）が祀って巡礼寺院となり，高位と低位のカースト間に土地をめぐる葛藤を生じさせた。第四は，ケーララ北部の地域社会を越え，ムンバイー（ボンベイ）などの都市や海外でも祀られるようになる。ムッタッパンの口頭伝承と信仰は，地域から地方，都市へと拡大した。一方，ポッタン神話は，不可触民（現在の指定カースト）がブラーマンに殺害されて神格化したと語られているが，一般に普及した話は，ブラーマンであるシャンカラーチャーリヤが，神の化身した不可触民に出会って改心したという物語である。後者は，ケーララ生まれの高名な哲学者に託した話で，民俗学者が記録して出版し，共産党支持者がカーストの平等を示すとして，好んで引用し，政治的に利用されている。神話には，記録化・文字化されるものと，記憶のまま残されるものがあり，カーストや地域で微妙に異なり，民俗的な話と哲学的な話は接合と分離を繰り返す。神話は多元的に生成され，権力対立の中で選択され，記録や記憶との相互作用の中で熟成されていくとする。

第5章では，社会の中での儀礼の変化を検討している。近年の傾向は，タラワードや寺院での儀礼の再生と，舞台上でのパフォーマンス化である。テイヤムの儀礼は独立運動期から1960年代には，政治的不安や飢饉，土地改革の影響で一部では中断されたが，1990年代になって再開されるようになった。変化の要因は，①母系制崩壊後に部外者の手に土地が渡ったことに対する母系親族の不満の高まり，②1940年以降に南部から北上してきたシリア派キリスト教徒の土地獲得に対する反感の増大，③1980年代から急増した湾岸諸国への出稼ぎが現金収入をもたらし経済的に豊かになったこと，④所属するカースト寺院やタラワードの儀礼を執行し，文化的ルーツを求める志向が生まれたこと，などである。

1960年代以降にはテイヤムが舞台芸能として評価される傾向も生まれた。これに関しては，高名なテイヤッカーランのライフヒストリーを検討し，貧しい境遇から，カラッカーラン（アーティスト）へと社会的地位が上昇した経緯を具体的に明らかにした。指定カーストの地位上昇は，中央政府による国民国家への統合，ケーララ政府の地域文化奨励，地域の文化団体の活動による名声の獲得，地域や場所を越えた舞台化の演出など，外部からの働きかけと連動して進んだという。政治の変動や観光化の影響が加わり，儀礼の意味づけにも変化が生じた。他方で，1990年代後半に，テイヤムの舞台化に反対する運動が生じ，それを許容する人々と論争になる。州政府や左派団体はアートとしての価値を重視し，伝統保存をアピールする舞台公演を支持し，右派団体は信仰と慣習を重視して舞台公演に反対した。そこには，世俗主義と社会主義を主張する共産党と，これに対抗するヒンドゥー至上主義で原理主義の傾向を持つインド人民党(B. J. P.)という対立や，共産主義対資本主義という政治イデオロギー，グローバリズム対ローカリズムの様相も加わり複数の対立や葛藤が錯綜している。テイヤムは文化と政治が絡み合う「闘技場」であり，結果的には伝統保存の動きが，逆に「新たなテイヤム」を創出していることを明示した。

終章では，現在では「テイヤム」と呼ばれている現象が，時代的変化によって認識のされ方を変えてきた経緯を述べる。19世紀にケーララを訪れた宣教師や民族誌家は，テイヤムを悪魔の踊りとして否定的に扱ったが，1930年代に地元の高校教師や郷土史家らが，儀礼や神話の意味を掘り起こして起源や

カーストとの関係を研究し，価値が認められるようになった。最近では，テイヤムの衣装や踊りの芸術性が評価され，アートやパフォーマンスと見なす人々が出現し，意味と多元的なイメージが生成されて，性質や形式，参加者や統合の仕方に変化が生じた。演出家とパフォーマーと観衆の相互関係が確立されつつあるとも言える。タラワードやカースト寺院の儀礼では宗教性が濃く，形式が定められ，参加者は単一カーストで，地域統合が重視されるが，大祭ではパフォーマンス性を帯びて，娯楽や観光化，商品化の要素が強くなり，形式は自由度を増し，多数のカーストはもとより，ムスリムやキリスト教徒も祭礼委員会に加わり，地域社会を越える方向へと変化した。

最後に，サンスクリット文化と民俗文化というヒンドゥー文化を把握する二元論が再検討される。テイヤムでも，サンスクリット化という地位向上運動に伴って双方の間に動態的な揺れ動きが見られるが，商業主義や観光化，伝統性や権力誇示など外部との相互作用により，文化が再解釈されて意図的に選択され再創造される戦略的資源になりつつあることを強調した。第４章で分析したムッタッパン神話では，祭祀権を握ったカーストによって神話が読み替えられ，二つの文化を基盤に持つ二つの神話が時には接合され，時には地域の枠組みを越えて受容される。儀礼の場では，サンスクリット文献の神々の由来譚（プラーナ）と結びつけて寺院の歴史や権威を示す一方，ケーララ北部でのみ行われるという地域性やユニークな民俗文化の要素を強調する。サンスクリット文化と民衆文化は，様々な主体によって操作され，意図的に融合され対立しつつ作り変えられていると結論づける。

本論文は，儀礼が宗教性を基盤とした固定的な要素を持つだけでなく，社会の中で，権力やイデオロギーに影響されつつ形態を変え，生成され続けていることを明らかにした重要な業績である。マラヤーラム語の文献も駆使しており，聞書きや参与観察に止まらない深みのある内容を持つ。方法論としては，機能主義や構造主義，象徴の解釈学では把握できない動態的な側面を分析して，従来の大伝統と小伝統の二元論や全体論というモデルを越えて，近代化とグローバル化を視野に入れる新たな分析視点を提示した。総体的に言えば，儀礼を単なる「意味と象徴のテキスト」でなく，資源化され消費される「喚起ポテンシャル」として把握するという，現代的視点を持った人類学の論文として高く評価したい。

但し，パイオニアワークであるだけに，今後の課題とすべき問題点が残されている。第一は当事者の意識や解釈をより共感的に記述して考察することの必要性である。特にテイヤムの託宣に指示を得つつ，危機を乗り越えて日々の暮らしを生きていく女性たちの多様な意見や視点の組み込みが求められよう。第二は地域の伝統的なコスモロジーの分析が，現象の複雑さゆえに記述のレベルに止まっている。地域社会の文脈を踏まえて解読すれば，変化の実態をより明確化し説得力ある議論が可能になると思われる。第三は現地語での記述に慎重さを期すだけでなく，サンスクリット語との照応や，英語や日本語への翻訳など，多くの言語間の「文化の翻訳」を意識して丁寧に議論を進める必要がある。儀礼の中核の憑依についても，当事者の説明では表現が微妙に使い分けられており，担い手を霊媒として一元化しない説明に再構成すべきかもしれない。第四はテイヤムという地方的な事例を如何に一般化して提示するかという課題がある。ケーララ文化全体との関係や，隣接するカルナータカのブータとの比較などを含めて相対化し，インド全体の中に位置づけて，個別から普遍への道を提示すべきであろう。第五に変化の様相については，カーストごとに違いがあり，特に低位に位置するティーヤの精力的な地位上昇運動が中核になって変化が加速されている点に注目する必要がある。第六は方法論として，分析概念の大伝統と小伝統の関係をかなり静態的に捉えてしまった考察には再考の余地がある。今後は，民俗の近代化や政治性の問題にも焦点をあてるべきであろう。

本論文は，こうした問題点や課題を残してはいるが，マラヤーラム語を駆使した精緻な現地調査に基づいて，宗教儀礼が社会変動に対応して変容し再創造へと向う動態的過程を明らかにし，ケーララという特定の地域にとどまらずに，現代世界の動きも視野に入れた優れた研究であり，今後の展開と成果が期待出来る。以上のような観点から，南インドの特徴ある民俗・儀礼・芸能の本質を明らかにしたのみならず，人類学の新たな地平を切り開いた独創的な業績として，博士（社会学）学位の授与に値するものと判断する。

博　士（社会学）［平成 16 年 7 月 14 日］

甲　第 2292 号　西山　志保

ボランティアとサブシステンス—阪神・淡路大震災が生み出した市民運動の新たな潮流—

〔論文審査担当者〕

主　査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
　　社会学博士　藤田　弘夫

副　査　慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員
　　博士（社会学）　有末　賢

副　査　早稲田大学文学部教授・大学院文学研究科委員
　　社会学修士　浦野　正樹

内容の要旨

福祉国家の再編に伴い，人間の「生」を支える市民運動が重要な役割を担うようになり，その動きを捉える理論の構築が早急な課題となっている。本稿は，ボランティアや NPO, NGO などの市民運動が，「生」のかけがえのなさに配慮する「ボランタリズム (voluntarism)」の行為により，人間存在にとって不可欠な根源的関わりを生み出すこと，そしてこれが異質性を受容する新たな市民社会を構築する可能性を持っていることを，「サブシステンス (subsistence)」という理論的視座から考察するものである。特に阪神・淡路大震災後に生み出された「生」に関わる市民運動を，具体的事例として分析する。

第 1 章では，本稿の分析視点と概念の検討，先行研究との関連を明らかにした。阪神・淡路大震災後の市民運動は，他者の苦しみから立ち上がる受動的な主体という「身体性（受苦・受動性）」と，他者の「生」の個別性への配慮をテーマとしている点で，既存の運動論に大きな思想的影響を与えるものであった。そこで欧米の「市民セクター」論に基づく先行研究への批判をふまえ，「生」に関わる市民運動をミクロ・レベルでの個人間の相互関係として捉えながらも，それをマクロ・レベルの歴史的—社会的変動のダイナミズムの中に位置づけ，そこから運動の社会的意義と可能性を検討した。

「生」に関わる市民運動は，人間存在の基盤となる「生命圏」と「生活圏」の交差する領域に立ち現れたという意味で，既存の社会運動論の新たな局面を示している。こうした運動の社会的意義を捉えるために，「サブシステンス」という理論的視座に注目した。ここでは「サブシステンス」を，市場経済との対抗ではなく，人間存在の基盤となる「生命圏」と「生活圏」の重なる領域，いわゆる「生 (life)」の領域で，その個別性を尊重する根源的関係性を捉える理論的視座として規定した。つまりサブシステンス